

—知恵の書 18章・6-9、ヘブライ 11章1-2、8-19、ルカ 12章・32-48—

〔そのとき、イエスは弟子たちに言われた。〕 « 「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。」 » 「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言うておくと、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒がいつやって来るかを知っていたら、自分の家に押し入らせはしないだろう。あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」 -ルカ 12章-

旅人

闇の世にあつて「信仰」は、信じた人に「生きる力」を与えます。

信仰は、ただ闇雲に進むのではなく、目的に向かう道を確認するからです。その道を示し得るのは、神の他ありません。

キリストは、人類を救うために人間となつて来られた神ご自身です。それ故、キリスト以前、キリスト以後に「救い主」を名乗って来る者は、すべて偽り者であることを識別しなければなりません。彼らの目的は、人間の救いではなく、私利私欲ゆえに、羊たちを喰い物にする狼に譬えられる者たちだからです。

眞の救い主は、自分の利益を求めません。我が子のために命を捨てる「眞の親」です。

この親を知った人は、「親の実家」を目指して人生を「旅人」として歩み始めます。時に、旅に疲れて立ち止まる人は、

ふと、出てきた故郷を恋しく思うものですが、神が示す、更に勝った故郷を信じ、熱望して旅立った、私たちの始祖アブラハムは、残してきた故郷を振り返らず、ひたすら永遠の命の親が待つ、天の故郷（神の国）を目指す信仰の父でした。

この父の子孫にして、イスラエルの民は、荒野の苦境のなかで、自由よりも、奴隷であった時の「腹の満腹」を恋慕う未熟な不信仰者たちであつたことを、私たちは自分に置き換えて思い起こします。神の国を目指す旅人とは、自分を世界の中心に置いて生きていた生活から、宇宙世界的设计者であり、建設者である神を知つて、ひたすらその国を目指す、目覚めた信仰者たちだからです。

聖書は、イエスに癒された人が、エルサレムに向かう主に従う人になる

ことを記しています。

エルサレムとは、眞理に逆らう者たちがイエスを十字架に着けようと待っている刑場ですが、イエスは自分に従う人を喰い物にする悪霊の使者ではなく、従う人々に喰われるために命を捨てる、眞の救い主でした。

戦争や環境破壊にウイルス汚染、世がどんなに闇に包まれても、富や人間ではなく、ひたすら神への信仰に留まり、目覚めてこの旅を、希望のうちに続けましょう。どうか、同伴してくださるイエスが、私たちの重荷を降ろしてくださるその日が来るまで。

2022年 8月7日

主任司祭 昌川信雄

